

桃花平

林道

峠をトンネルで突っ切るバイパスができて以来、この旧道は見捨てられてしまった。まだ国道指定らしいが、割れて砕けた舗装、倒れかけたガードレール、左右から生い茂る樹木などで林道と呼んでもおかしくはない。快適なバイパスを選ばず、わざわざ壊れかけた旧道を通る人はめったにいない。特に日が暮れてからは、真っ暗で路肩も見えないこの道を好んで通るクルマはまずない。

ヘッドライトをハイビームにしてドライビングライトまで点けても、山肌に沿って曲がりくねった道ではそう遠くまでは見通せない。今夜のように月も星もない夜はクルマの明かり以外すべてが闇だ。時折路面に落ちている石を避けながら徐々に高度を上げて行っただ。

もうかなり涼しくなっただはずだ。エアコンを切って窓を開けると期待通りの冷たい夜気が車内にすべり込む。この清浄感のために旧道を走っているといってもいいのだが今夜はいつもとは少し違った。湿気が含まれていない。雨になるのかもしれない。

数分走ったときヘッドライトの光の中に白いもやのようなものが見え始めた。数秒も経たず、もやは一瞬で濃度を増し、クルマは濃い霧に包まれてしまった。

フェンダーの先二、三メートルほどの視界しかない。これは止まるしかないかな、と思いながら歩くほどのスピードまで落とした。道の左側は落ち込んだ谷、右側は土の崖なのはわかった。右側に車を寄せ、路肩を見ながら進んだ。

十分は経っただろう。霧は相変わらず濃い。山道を走る以上こういった状況は覚悟の上としても、今夜この道を選んだことを少し後悔し始めた。霧で何も見えず、次第に閉塞感が増す。外に出て何か大声で叫びたいなと思ったとき、突然クルマの直前に女性と自転車が現われた。

あわててブレーキを踏む。幸い追突はしていないようだ。女性が自転車を押して歩いている。急いでドアから出て「大丈夫ですか」と声をかけた。

「ええ、平気です……いえ、もうだめです」

「ぶつきましたか？」

「いいえ、ぶつかってはいませんわ。そうではなく自転車を運ぶのが……」

そういつて微笑んだ。たしかに自転車を押すのに適した服装ではない。山道を歩くのにもふさわしくない。マキシ丈のワンピース、ヒールの靴、つば広のチューリップ帽、高原の芝生の上なら似合いそうだ。

「はあ、そうですね」私はかなり間抜けな返事をした。

良家のお嬢さんといった印象の彼女は三十歳少し前だろうか。帽子の両側のつばを頬まで下げている。

「こんな夜中に自転車を運んでいるんですか？」

「運べると思ったのです。ここまでは押してこられました」

「無理ですよ、この山道では」

「そうでしょうか……そうですね。もう無理のようです。自動車ならすぐですけど、歩くと鳶沢は遠いですね」

「鳶沢からここまで？ 押してきたんですか」

「ええ、でももうやめます」

鳶沢は山の下を集落で、今夜私が走り始めた場所だ。ここまで五キロ以上はある。

「そのほうがいいですよ。よろしければ家までお送りします。自転車は載せられませんが」
「お願いします。本当のことを言うと、もう一歩も歩けないくらいいたびれてしまつて」

彼女は自転車を手側の崖に立てかけてクルマに乗り、大きくフーツと息を吐いた。

「私のこと、さぞ馬鹿な女だと思つていらつしやるでしょ？」

「馬鹿とは思いませんが無謀だとは思います。それで、自転車はどうします？」

「盗む人などいませんわ。いずれ自転車屋さんに頼んでトラックでも出していただきますよう」

走り出すと霧は少しずつ晴れていった。再び左右の樹木がライトに映し出される。

「まっすぐでいいんですね？」一本道なのでまっすぐに決まつてはいるが、念のためにきいてみる。

「はい、まっすぐです。しばらく行つてから左に入ります」

左折できる道があつたのだろうか。何度も通っているが大きな十字路やT字路はなかつたように思う。

「本当に真つ暗ね。歩いているとそれほど気になりませんでした、自動車の明かりがあると暗いのがよくわかります」

「街灯というか、道路の明かりはありませんからね。こんな道を歩いていらつしやつたんですよ。やはり危ないですよ」

「危ないですか？ どうして？」

「だって、もし悪い男がクルマで通りかかったりしたら」

「夜になると誰も通りませんわ。この道は昼間のほうがよほど危険です。それとも、あなたが悪い男？」
彼女はいたずらっぽく笑いながら言つた。

「いや、それほど悪いとは思つていませんが、善良ではないかもしれない」

「それでは悪くなる時には自動車を止めて教えてください。わたくし、そのときに考えますので」

延々と続いていた上り坂が、ふと平らになった。ここから一キロほどは平坦な地形になる。いつもここまで来ると何となく安心する。

「もうすぐ左に曲がつてください」

彼女は前を見つめている。自分の家へ行く道でも、同じような木々の中では見逃しかねないだろう。

「その先です」

スピードを落として左側を見ながら進むと、たしかに樹木に隠れて細い道の入り口があつた。

「ここですね」

ライトの中に左折する道が見えた。クルマ一台分の幅しかない。だが、荒れた道ではなくきちんと砂利が敷かれ、きれいに整備されていた。

「こんな道があつたんですね。知りませんでした」

「新しい道ですから。いずれは道幅をもっと広くして、コンクリートで舗装すると言つていました」

なるほど。県か町が別荘地でも開発しようとしているのだろう。このあたりなら標高も高いし環境も悪くない。もう少し詳しい話を聞こうと思つたところで道は二股に分かれた。

「どっちですか？」

「左にお願いします」

アップダウンはほとんどないが見通せないカーブが連続する。対向車は来ないとしても気は抜けない。道は

一本道ではなく、小さな十字路や二股が次々と現われた。そのたびに彼女は方向を示した。

迷路のような道をしばらく走ったとき、ライトの中に石造りの立派な門が照らし出された。鉄の扉が内側に開いている。

「ありがとうございます。着きましたわ」

「大きな家ですね」

「そうでもありません。門から乗り入れてください」

門の内側には石畳の道が続いていた。道の両側は樹木だが山間の自然林ではない。整然と並んだ木々は、あきらかに人手で植えられたものだだった。

石畳の道は九十度右に折れている。車を右に向けたとたん、ホテルと見まごうばかりの大きな木造の西洋館が闇の中にあつた。

洋館

玄関の車寄せで彼女を降ろす。

「お待ちになってね」と言い置いて彼女は闇に消えた。

最初に玄関灯が点き、次に建物全部の明かりが一斉に点く。あたり一面が電球の黄色っぽい光に包まれ、周囲の木々がさらに深い闇に沈んだ。

建築にはまったく素人の私でも、館が昨今の流行とはかけ離れたものなのは一目でわかった。大正ロマンか昭和モダニズムか、レトロという言葉は好きではないが、かなり大時代な建物だ。

「どうしたの？ お入りになって」彼女が玄関から呼んでいる。私は招かれるまま館に入った。

「お送りしてそのまま帰るつもりでしたが」

「そんなこと、できませんわ。自動車に乗せていただいて、とんだ寄り道をさせてしまったのに」

玄関ホールは二階まで吹き抜けだった。天井には太い自然木の梁があり、錬鉄とガラスのシャンデリアが下がっている。柱も自然木で壁は白い漆喰で塗られていた。

「おかしいでしょう、父の趣味ですわ。建物の外側はアールデコ、中はゴシックまがい。わたくし、この家でどんな服を着ていればいいのでしょうかね」素早く瞳を動かしながら彼女は言った。

あなたは何を着ていてもかわいいですよ、と言おうとしてやめた。軽口をたたけるほどの余裕はまだない。

「いや、これは……見事なお屋敷ですね」

「そうかしら。ただ広いだけと思うときもありますわ。それより、こちらにどうぞ」

玄関ホールの右手、ホールとはアーチで区切られた応接間風の一角に案内された。

「すぐに戻ってお茶を淹れます。ここでお待ちになつて」

山深い森の中にこんな屋敷があるとは、地元でも聞いたことがない。どこかの大金持ちの秘密の別荘だろうか。それとも……一瞬「狐狸妖怪」という言葉が思い浮かび背筋が寒くなった。いや、これは現実だろう。森の中に豪邸があったとしても、それが不思議な理由はひとつも無い。

室内の装飾は、どのひとつをとっても前時代そのままだ。真鍮のランプスタンド、床に敷き詰められた大きな赤い絨毯、ステンドグラスの小窓、猫足のテーブル、壁にはミュシャのメディアとジスモンダが対になって掛かっている。骨董趣味もここまで徹底すると、かえって自然な気がする。

屋敷は静かで他の人間の気配は感じられない。こんな広大な家に、彼女は一人で住んでいるのだろうか。

「お待ちせしました。お紅茶は好き？」

ワゴンを押して彼女が戻ってきた。フレアが付いた生成りのワンピースに着替えている。床に届くほどではないが、スカート丈はさつきより長い。

「支那茶にしようかと思いましたが、お紅茶のほうが落ち着きますわね」

銀のティーポットと白磁のカップ。彼女はゆつたりと紅茶を淹れる。良家の女性なのは見間違いない。

「大変失礼ですが、お一人でお住まいですか？」

「いやですわ、あらたまつて。ええ、一人です。父が、誰か付けようかと言ったのですけれど、他人がいると何かと面倒ですから。一人がいいのです」

「それじゃ、紅茶をいただいたら早々に失礼します」

「違いますの。家にいつも他人がいたら気詰まりということですよ。あなたは別です。それに、ここ二三日、やはり一人ではつまらないな、とも思っていました」

「わがままなお嬢さんですね」

「ええ、わがままです。治すつもりはございません。そうそう、まだわたくし、名前を申し上げていませんでしたね」

「いや、こちらこそ名乗っていませんでした」

私は自己紹介した。名前と、売れないライターであること、旧道の先の桑平に小さな別荘があること。

「じゃ、お近くのね。お隣さんだわ」紅茶を注ぐ手を止めずに彼女は言った。「わたくし、親しいお友達からはジュシと呼ばれています。ですから、ジュシと呼んでください」

「ジュシさん、ですか？」

「本名はヒサコです。寿の子と書いてヒサコ。ね、おめでたいでしょう？母が言うには字画が良いのだそうです。でも、ちゃんと読める方は少ないようで、トシコとも読めますし」

紅茶は素晴らしくおいしかった。砂糖を入れなくても、ほのかに甘みがあった。

「立派なティーレディーだ」

「まだまだですわ。下心がある人に紅茶はうまく淹れられないそうです。わたくし、煩惱のかたまりですから、お茶を上手には淹れられません」

「どんな煩惱？」

「ありとあらゆる。百八つの二倍以上、三倍でしょうか。昔、パリに留学しておりましたの。そこで、フランス人のお友達に煩惱を説明しようとしたのですが、いくら説明しても『それは原罪のことか』と言われて、わたくし、あらためて自分は西洋人ではなく日本人なのだと思い知らされました」

「そんなカルチャーショックを受けてみたいですね。私の場合、イタリアに行ってフィアットばかりなのに驚いたくらいですよ」

「それも大きなカルチャーショックですよ。当然と思っていたことが、実は通用しない世界があった、と感じればショックです」

「それでは今夜の私はショック状態です。こんな山の中に大きなお屋敷があつて、素敵なお嬢さんが住んでいる。夢にも思わなかったショックです」

「まあお上手ですこと」

ジュシは壁のミュシャに目をやった。

「あの二枚の版画、どう思われます？」

「ミュシャのメディアとジスモンダですね。オリジナルの版本でしょうか」

「あら、うれしいわ。おわかりになるのね」

「美術はまったくわかりませんが、ミュシャだけは好きです」

「わたくしも大好き。西洋画が好きな人に言わせると、ポスターなど芸術に入らないそうですが、そんな高慢なご意見、拝聴する気にはなれません」

「私も、どうも芸術好きの人たちの言うことはよくわかりません。それほど名のある作家の絵は良いのかなと

思いますよ。たとえばルノアールなど、近眼の画家が描いたとしか思えない」

ジュシは声を立てて笑った。

「楽しいご意見ね。わたくしも同感です。印象派の絵は、どこか本性を隠しているように感じられませんか？人間の汚い部分を隠しているような。ミュシャは逆だと思ふのです。ポスターですから芸術作品とは思われていなかったのでも何も包み隠す必要はなかったのですね。煩惱をそのまま描いています」

「また煩惱ですか？」

「あら、煩惱ばかりね。もう一杯、お紅茶いかが？」

ジュシはティーポットから濃くなつたお茶をカップに半分ほど注ぎ、お湯を足した。

「この最後のお茶の淹れ方が、よくわかりませんの。香港のティーレディーさんには、どうしても敵いません」二杯目も最初と同じようにおいしかった。

「いやあ、これが二杯目とは。脱帽します」

「うれしいですわ。脱ぐお帽子がなくて残念ですけど」

「次は烏打帽でも被つてきましようか」

電話のベルが鳴った。音量を下けているのだろう、少しくぐもつた音で、屋敷のあちこちで鳴っている。

「ちよつと失礼いたします」

ジュシはソファから立ち上がり、壁際の暗がりです話器をとった。コードレスではなく有線の黒電話だ。電話機までインテリアに合わせている。受話器の握りが細めで、わずかに見えた本体は三号電話機のようなだ。

ジュシはコードに指を絡めながら、あまり気乗りしない様子で話している。

「・・・そんな動物は出てきませんわ。鹿と狸は見ましたけれど。・・・平気です。まだ戻る気にはなれません。

「…ええ、それではお父様にお気をつけてと申し上げて。…はい、おやすみなさい」

「ごめんさい。母からでした。あさつて、父がヨーロッパに発つので見送りに来ないかと言っていました。いいえ、ただの口実ですよ。帰ってこさせたいのです」

「私が親御さんでもそう思うでしょう」

「どうして？」

「だって、危なっかしいですよ。若い女性が一人で山籠りなんて」

「そうでしょうか？ わたくしが男性だったらよろしいの？」

「いや、男だったとしても…それは難しいところです」

「ほら、お答えにならない。ご心配は無用ですわ。屋根と壁さえあれば、わたくし、どこでも暮らせます。ところで、お夕食はお済み？」

「いえ、まだですが、これ以上お邪魔するのは」

「心配ですか？ それともご遠慮？」

「両方です」

「正直なお方。わたくし、とてもわがままですから、気に入った方しかお茶にもお食事にもお誘いしません。女の特権かしらね」

「それでは特権に屈することにします。本当は私も帰りたくないんです」

風 音

ジュシに連れられて応接間を出た。ジュシは応接間をサロンと呼んでいた。隣には広いダイニングルームがあったが、私たちは通り過ぎた。

「二人だけですから食事室はやめてキッチンでいただきますしやう。よろしい？」

キッチンとはいっても私の別荘全体よりはるかに広い。壁の一面には木製の扉にクロームの取っ手が付いた冷蔵庫が造り付けられている。もう一面にはどんなパンでも焼けるようなオーブンもあった。

「ホテルの厨房みたいですね」

「これも父の趣味。なんでも大掛かりでないと気が済まないらしいのです。わたくしには持て余し気味。そうそう、鹿肉がございましたわ。お好き？」

「はい、大丈夫です。ただ、あまりゴテゴテしたフランス風のソースはちょっと」

「心得ています。ごくあっさりしたソースにいたしましょう。さあ、お座りになって」

広いキッチンを見回しながら、私はまだ立っていた。

「その小テーブルにどうぞ。家族の朝食用テーブルです。作りながら食べられますし、お料理をワゴンで運ばなくても済みますでしょう？ アペリチフはミモザでよろしい？」

私の返事を待たずに真っ白なエプロンをかけ、冷蔵庫からオレンジを取り出して手際よく絞る。

「グラスの種類にうるさい方？」

「いいえ全然。野点の茶碗でなければ」

ジュシは声を上げて笑った。

「面白いいたずらね。お手前の先生が点てたお茶を、そうっとミモザとすり替えてしまうの。それでもみなさんきつと、しかつめらしくお飲みになるわよ」

「いたずらなら手伝いますよ」

「そのときにはお願いしますわ」

ジュシは大き目のタンブラーにオレンジジュースを注いだ。

「これで良かったのかしら。シャンパンが先でしたっけ？」

「私も知りません。どちらでもいいのでは？ステアすれば同じでしょう」

「そうね、おなかに入るのに順番はありませんから」

「そう言いながらシャンパンのコルクを抜く。モエ・エ・シャンドンのドン・ペリニオン。」

「そんな良いシャンパンをミモザに？」

「これしかありませんの。それに」とラベルを見て、「当たり年でもありませんし」

ジュシに平然と言われると、それもそうだな、と思ってしまう。

グラスのふちにオレンジピールを添えたミモザは花園に遊ぶ蝶のイメージだ。ジュシも鹿肉を焼きながらミモザを飲んでいる。ジュシが言った

「本当に自転車に乗りたかったのです。明け方、涼しい空気の中を走ったら、どんなに爽快だろうと」

「このあたりの砂利道では無理でしょう」

「門までは行けますわ。石畳ですもの。それに、近々この周辺の道路はコンクリート舗装になりますし」

「それは嬉しいですね。鳶沢からの道も整備されるのでしょうか」

「国道は無理。今、お国にそんな余裕はございませんでしょう。舗装されるのは国道からこちら側だけ。父がやらせます」

「あの、お父様は何をしている方で？失礼ですが、とんでもなくお金持ちに思えます」

ジュシはフツと笑って、

「たしかに。お金ならあるようです。ある、というか、溜まってしまったのね。三井や住友のような財閥ではございませんのよ。好きな事業を勝手にやっていたらこうなった。そんな気がします」

「どんな事業かうかがっても？」

ライター根性というのだろうか、知りたいことは聞かないと気が済まない。

「そうね、たとえば先ほどのお紅茶。父がセイロンの農園から買い付けたものです。来年には農場自体を買って、もっと良い葉を育てると言っています。あと、あなたがご覧になったものでは絵画もそうですわ」

「ミュシヤですか？」

多分他の絵もあったのだろうが、私はミュシヤしか見ていない。

「ミュシヤはわたくしの趣味です。父の部下の方がパリやプラハで買ってきてくださいます」

「それじゃ貿易商をなさっている」

「貿易商・・・少し違う気がします。なにかを想像して、それが現実になるのが楽しいだけなのでしょう」

「道の舗装もそうですか」

「ええ、父はこの一帯を新しい別荘地にしようとしています。本物の別荘地だそうで、そのためには、まず道を整備しなくては・・・さあ、お食事の支度ができました。お手伝いしてくださいさる？」

ジュシがカウンターに並べた皿や食器を私がテーブルに運んだ。ワインは赤で、見たことのない銘柄だった。「一品料理ね。こんな料理をお客様にお出ししたのがお母様に知れたら叱られてしまうわ」

「いや、今夜は特別です。私が図々しく居座っているのがいけない」

ワインは私があげた。城の絵のラベルでギリシャ産。まずジュシにテイスティングしてもらってからグラスに注ぎ分けた。

「特別な夜に乾杯」ジュシが言った。

「山道にいたわがままな女性に乾杯」私が応じた。

新鮮さが際立つワインだった。フランスワインにありがちな太いボディーや繊細すぎる香り立ちとは無縁で、少々無骨な感触ながら植物に調和した自然の味わいだった。

「カステル・ダニエリスというワインです。鹿肉には合うと思いました」

「ベストマッチです」

鹿肉のソースは、かすかに木の芽の香りがするあつさりした味だった。レシピは見当も付かない。

「おいしいです。料理学校でもいかれたんですか？」

「いいえ、自己流です。基本は家の料理人さんには少し教えていただきましたが」

食べながら、ふと「運転して帰れるかな？」と思った。こんな山の中では警察の検問などないだろうが、酔っていないつもりでも、ガードレールを突き破って転落してからでは取り返しがつかない。そうだ、ここから少し離れたところまで走って、朝までクルマの中で寝ていればいい。そうと腹を決めたら、ジュシとの食事がさらに楽しくなった。

「どうなされたの？ 嬉しそう」

「そうですか？ 今夜の私は幸運だな、と思っていました」

「わたくしも幸運です。毎日ひとりでお食事するのに飽きていました。そうね、ちょっと寂しかったのです。あなたがいらして、今夜は楽しくて」

「お嬢様のお役に立てれば、身に余る光栄です」

「いやですわ。お嬢様なら蝶よ花よで深窓の奥の奥から出てまいりません。こんな山の中でお嬢様もありませんでしょ。わたくしがここに居るのは一種の仕事です。管理人といったところかしら。この家の管理人。それと別荘地全体の管理人」

「お父様から言いつかった？」

「半分はそうです。もう半分は面白そうだったので」

「勇敢ですね。いつからここに？」

「家が完成したのがこの春でした。そのときから。最初のうち、とても寒かったわ」

「ずっとお一人で？」

「ええ、いつもはね。ときどき別荘地を買いだいたいとおっしゃるお客様がお見えになります。そのときはご案内したり、こちらにお泊めしたりで忙しくなりますのよ」

「もう分譲されているんですか。知りませんでした。看板も立っていないし」

「看板も広告もありますの。お客様は父のお友達や見知った方ばかり。知らない方にお譲りするのを父は嫌がっています」

「なにか秘密っぽい感じがしますね」

「秘密などありませんわ。父は軽井沢のようなことにははたかつかないと思っていますだけです。二年くらい前から、

父が軽井沢のお友達にご招待されたとき、ひどく怒って帰ってまいりました。『あんなせせこましい場所が別荘地だとは、まったく許せん』などと言って。こまごました土地にこまごました別荘を建てたら東京となんら変わらん。涼しい場所にいたいのなら扇風機の十台も買えば済むだろう、などと憤慨しておりました」

「一理ありますね。私のところも、お向かいとベランダが向かい合っていて、やはり気になりますよ」

「そうでしょ？ですから、なんの気兼ねもなく過ごせる別荘地にしたいのです。土地は一番小さい区画でも四千坪あります。そこにお城を建てようとバンガローを建てようと、買った方のご自由ですけれど」

四千坪という広さは、ちよつと想像がつかなかった。

「このお屋敷の土地はどのくらいあるんでしょうか？」

「ここですか、詳しくは知りませんが、たぶん一万坪以上では」

門から玄関までだけでもかなりあった。とりあえず私にとっては『広大な』土地だ。

「自分の土地で迷子になりそうだな」

「一区画お譲りしましょうか？」

「とても買えませんよ。そんな甲斐性はありません」

食事は終わりにかけていた。鹿肉もワインも気持ちの良い味だった。

「デザートは何が好み？といつても果物しかございませんが」

「いや、もう満腹です。何も入りません」

「それではブランドーはいかが？」

「ジュシさんも召し上がるなら」

「もちろんいただきますわ。少々、ね」

部屋の隅の棚から、ジュシはグラス二個と中央が太くなった独特の形のボトルを持ってきた。

「シルバーバカラですか」

「これでいいかしら。それともパラディになさる？」

「カミュで充分です。いや、充分なんて言うのは贅沢だな」

「贅沢ですか？お酒って、値段ではないような気がします。希少価値でもありません。ただ、おいしいか、そうでないかの二種類。わたくしには、カミュならシルバーバカラが一番おいしく感じます」

「パラディはどうですか？」

ジュシはちよつと考え込んだ。

「本当のこと言つてよろしい？」

「もちろんです」

「秘密ですよ。わたくし、ヘネシーならXOのほうがいい気がするのです」

私たちは顔を見合せて笑った。

「寝かし過ぎちゃっているんでしょう。バランタインの三十年みたいに。酒ではなく、おいしい飲み物になってる」

「そうそう、お酒じゃありませんわ。飲めば酔いますけれど。ずいぶんお酒にお詳しいのね」

「意外ですか？昔、そっちのほうも書いていたので、必要経費ということでしょうかと飲みました」

ブランドーの芳香を楽しみ、少々酔ったかなと思ひながら、どうして自分はここにいるのだろうと醒めた感

覚もあった。人気のない山の中で女性に会い、夢のような豪邸に案内されて旨い酒を味わう。もし女性が花や獣の精なら聊齋志異の世界だ。もしかするとこれは現実ではなく、本当は霧の中で運転を誤り、崖下にも転落したのかもしれない。死後の世界ならありえる話だ。

「あつ」ジュシが小声を上げ、周囲を見渡した。

「どうしました？」

「音がします。息をしているみたい」

たしかに外から音が聞こえる。私には風の音に感じられた。

「風でしょう。心配ありませんよ」

「ですから、風の音、わたくし、とても怖いのです」

「ただの風ですから、お屋敷にいれば安全です」

「いいえ、安全や危険ではなく、特に真つ暗な夜の風は恐ろしいのです」

ジュシはグラスを置いて立ち上がり、キッチンを意味なく歩き回った。

「いやだわ、早く収まらないかしら」

「大丈夫ですよ。私がお守りします」

会ったばかりの見知らぬ男にそう言われても、とても安心できるはずはないが、私にも『理由のない恐怖』は実感として理解できる。無色透明な恐怖だ。誰かが適度に話しかけるなり、具体的な行動目標があれば切り抜けられることもある。行動を拒否するほど恐怖心が強ければ、もう打つ手はないが。

「ジュシさん、食器を片付けませんか？ ご馳走になつてばかりでは申し訳ないので、私にも手伝わせてください」

そう言つて、私は皿や銀器を洗い場と思えるシンクに運び始めた。

「お客様にそんなこと」

「いいじゃないですか。水仕事は慣れています」

シンクには温水の蛇口もあった。お湯を出すと風の音はあまり聞こえなくなった。

「洗剤はどこですか？」

ジュシも食器を運び、二人並んで洗い始めた。ジュシの顔色は白かったが、少し落ち着いてきたように感じられた。

シンクに中性洗剤はなかった。スポンジの代わりに海綿があり、洗剤は外国製のクレンザーだ。

「応接間のティーセットも片付けませんか？ いっしょに取りに行きましょう」

廊下を歩く一歩一歩がジュシには恐ろしいようだ。しかし廊下は外壁と距離があるので風音は小さい。キッチンに引き返す足取りは、少しだけ軽くなっていた。

「ありがとうございます」ジュシが言った。恐怖に関することには触らない方がいい。私は笑つてジュシの顔を見た。

ティーセットも洗い終わつて、そろそろ潮時だろう。

「いやあ、良いお宅ですね。また伺つてもいいですか？」

「いつでもいらしてください。秋まではいるつもりでおります」

「私にお世辞は通用しませんよ。そう言われたら本当にまた伺います」

「お世辞や社交辞令は、わたくし苦手ですの。言っていると背中がぞくぞくしそうです」

「じゃ、ぞくぞくさせないうちに退散いたします。帰り道を教えてもらえますか？」

「えっ、お帰りになるの？」

「だって、もう夜中ですから」

「だめです。てっきり朝までいてくださると思っていましたのに。期待を裏切らないでください」

一夜

客用の寝室が用意されていた。ベッド二台の、ホテルのような部屋だ。壁にはミュシャのモラヴィア教師合唱団が掛かっている。ナイトテーブルに灰皿と煙草入れがあり、両切りのピースが入っていた。その横にはマッチが置いてあった。

やっとタバコにありつけた。灰皿は屋敷の各所にあったが、私のタバコはクルマの中だった。

両切りピースを立て続けに二本吸うと、ひどく疲れているのに気づいた。予想外の出来事の連続に、知らず知らずに神経を使っていたのだろう。時刻はまだ一時ごろのはずで、いつもならこれから仕事を始める時間だがここでは何もできない。タバコを消し、ベッドに置いてあったタオル地のガウンに着替えた。枕に頭を付けると、私はすぐに眠ってしまった。

控えめなノックの音で目が覚めた。窓の外では強い風が吹いている。明かりを点け、急いでドアを開ける。ジュシが立っていた。ナイトガウンを着てうつむいている。顔色は真っ白、泣いているようにも見える。

「大丈夫ですか？」

「いいえ、だめです。風が強くなって、怖くて、どうしようもありません」

とりあえず部屋に入れた。ドアを半開きのままにしようと思ったが、屋敷にはジュシと私しかない。「閉めます」と言ってドアを閉めた。

ジュシはベッドに力なく座った。そして、風音が大きくなるたびに震えた。

「いっしょにいますよ。安心してください。先ほどのブレンダーでも持ってきてみましょうか？」

「ここにいてください、いっしょに」

しばらくジュシの手を握っていた。ジュシは強く握り返してきた。

「いつもはどうしているんです？ 風の強い晩は」

「怖いですけど、一人のときは朝まで我慢しています。私の部屋は二重ガラスで音はあまり聞こえません。でも、どなたかがいらっしやると、一人では我慢できなくなってしまうの。ごめんなさい。こんなはずではなかったのに」

「謝ることはありませんよ。私も恐怖神経症なんです。最近、少しは良くなりましたが。怖いけれど誰にも理解されなくて、説明もできないのは辛いですよね」

「あなたも？」 ジュシは深呼吸して震えを抑えた。

「心療内科にも通いました。カウンセリングとか、ね。私の場合、何が怖いのか、きっかけが何なのか、まったくわからないんです。あなたのように対象物がわかっていけば、いくらか覚悟はできるのかもしれませんが」

「だめですよ、わかっていても。いつ風が吹くかと思ってしまうと、それだけで・・・」

「わかりますよ、いえ、多分わかります。さあ、なるべく力を抜きましょう。私がついています。頼りないですか？」

「そんなことはありません。近くにいてください」

少しだけ落ち着いてきたようだ。不自然に深かった呼吸が平常に戻りつつあった。

「ジュシさんのお部屋に移りませんか？ 音が小さくなるなら、そのほうがいいのでは」と言ってしまうと、私は後悔した。女性の部屋で朝まで過ごすことになりかねない。

「そうしていただけると、わたくし、とても助かります。眠れるかもしれません。来ていただけますか？」

「もちろんです」

失言だったとしてもジュシには良かったのかもしれない。長い廊下を二人で歩いた。ジュシは握った手を離さなかった。

廊下の照明はすべて点いていた。そればかりか、屋敷中のどの部屋の照明も煌々と点いていた。

「お屋敷中の電気が点きっぱなしですね」

「ええ、夜はいつも点けています。寝室だけ消します」

「電力会社の良いお客様だ」

「そうだと思いますわ」 少し笑った。

この屋敷のどの照明も白熱電球だ。蛍光灯に取り替えたらインテリアのコンセプトが台無しになるのはわかるが、どれだけ電気代がかかるのだろう。

ジュシの部屋には小さなキッチンが付いていた。クイーンサイズのベッドがあり、部屋の向こう側はサンルームになっている。サンルームにはまだ何も描いていない真っ白なキャンバスが何枚か立てかけてあった。二重ガラスの効果で風の音はごく小さくしか聞こえないが、ガラス越しに揺れる木々が見える。ジュシには良くないだろう。

「シェードを閉めましょう。すぐ済みます」

シェードは電動ではなかった。鉄のハンドルをいくつか探し出し、それぞれ回してサンルームのガラスを全部隠すと風音はさらに小さくなった。

「ありがとうございます。先ほど閉めようとしたのですが、ガラスに近づくのが怖くて」

「もう大丈夫ですよ。ここでは風は吹いていません」

「生き返りましたわ。もしかしたら眠れるかもしれません。あの……ここにいてくださるわね？」

ジュシの必死の言葉に、客室に帰るとはとも言えなかった。しかし、一晩一緒にいて、何事も起こさない自信もない。

「私は狼かもしれませんが」

「世の中の狼が全部悪いわけではないでしょう」

ベッドサイドの壁にはヒヤシンス姫が掛かっている。私は、幼さが残る姫を見た。

「横にならせていただいていい？」

「あつ、ごめんなさい。私にかまわず寝てください」

ジュシは大きなベッドの端に、ゆっくりと横たわった。私は近くにあった一人掛けのソファアに座る。

「だいぶ落ち着いた気がします。でも、まだ少し怖いわ。手の先の痺れが取れません。わたくしの隣に来てくださいませんか？」

「それは……」

結局、私はジュシの隣に横になった。ジュシはまた手を握ってきた。私が握り返すと、こちらに寝返りを打ち、私の胸に顔をうずめた。

「おやすみなさい、良い狼さん」

ジュシはまもなく眠りについた。私はその横顔を見ていた。美しかった。私はジュシの頬に軽く口付けした。「おやすみ、ジュシ」

差し込む日の光で目覚めた。一瞬、ここがどこかわからない。そうだ、森のお屋敷、ジュシの部屋だと気づいた。隣のジュシはもういない。さて、どういう顔をして朝の挨拶をすればいいのだろう。

「お休みになれました？」

昨夜とは違う薄緑のワンピースを着てジュシが部屋に入ってきた。

「はい、気持ちよく眠れました。あなたは？」

「安心したのでしょうか、すぐに眠ってしまいました。久しぶりによく寝た気がします」

「それはよかった。ところで、私は軒をかきましたか？」

「いいえ、軒も歯軋りもされていませんでしたわ」

いや、本当に訊きたいのは別のことだ。自慢ではないが、私は女心がまったくわからない男といわれている。「じゃ、ご迷惑はかけなかったようですね。……ところで、私は紳士でしたか？」

ジュシは私の顔を正面から見つめ、しばらく無言だった。そして、いたずらっぽく笑うと「紳士の定義にもよりますわ」と言った。

ジュシの目は笑っていた。私もつられて笑顔になった。その答えでは、疑問は何も解決しないのだが。

「朝食はいかが？ キッチンに用意してあります」

「いただきます。着替えてすぐに参ります」

客室に戻り、顔を洗って歯を磨く。髭は剃らないことにした。片刃のカミソリは苦手だ。

夕べ脱ぎ散らした服がきちんとハンガーに掛かっている。シャツとズボンはプレスされていた。ジュシが早

起きたのだろう。それとも秘密のメイドでもいるのだろうか。

ピースを半分ほど吸って消し、一階のキッチンに下りた。

「ここでもタバコをお吸いになって」

「ばれましたか。いや、食事の後にします。紅茶を味わいたいので」

「マナーは気にしません。お煙草はいつでもどうぞ。ポーチドエッグでよろしい？」

「ホテル以外でポーチドエッグは初めてです」

「ホテルほど上手に作れるかどうか」

料理人に少し教えてもらっただけというジュシの料理は、たしかに自己流なのだろうが、味にも見た目にも一種のセンスがあった。なるべくシンプルに、そして卒なく。生まれ持ったものなのか、日常の中で自然に身に付いたのか。

「ズボンにプレスまでしていただいて、驚きました」

「わたくし、したいことをしているだけです」

「でもご面倒だったでしょう」

「いいえ。面倒と思ったり、したくないと思ったら、誰に言われてもわたくしはしません。わがままですから」

「自転車を押して来たのも？」

「もう、それは言わないでください。失敗でしたけれど、自分のものは自分で運びただけです。ままならないこともたまにはありますわ」

「ジュシさんのような環境の方なら、身の回りの手数のかかることは他人に任せるものと思っていましたよ」

ジュシはフォークの手を止めた。

「あの、これを言っても理解してくださらない方が多いのですけれど、子供は親を選べません。生まれてくる環境も選べません。わたくしはたまたま、経済的に不自由のない家に生まれただけ。これは卑下することでも誇ることもないと思っています。もし貧しい家に生まれてきていたとしても、わたくしはわたくしです。あら、朝ごはんの話題ではないですね。ごめんなさい」

「いや、私の言い方が悪かった。あなたは多分、どこに生まれていてもジュシさんでしょう」

「そうありがたいですわ。たとえイワシと麦ご飯しかなくても、わたくしはジュシです」

食事の最後は紅茶だった。昨夜の紅茶に比べるとすっきりした風味だ。紅茶と飲みながらジュシを見る。朝の光の中でジュシは輝いていた。

帰りたくはなかった。正確にはジュシと別れたくはなかった。

「もう少しお邪魔していたいのですが、やはり帰らないと」

「どなたか待っていらっしゃるの？」

「誰も待つてはいません。一人暮らしですから。でも、仕事らしきものがあります」

「そう・・・じゃ、お引止めはいたしません。また来てくださる？」

「よろしければ」

「待っています。いつでもいらしてください」

来た道が複雑だったので、できれば簡単な地図を描いてほしいと頼んだ。ジュシはちよつと怪訝な顔をして、地図を描くまでもないと言い、帰り道を教えてくれた。それは本当に簡単だった。

玄関からクルマまで一緒に歩く。

「今度は何かお土産を持ってきましたよう。ご希望はありますか？」

ジュシはしばらく考えてから、両手を左右いっぱい広げて、

「こんな大きな花束にしてください」と言った。

「かしこまりました。世界中の花を束ねてまいります」私も応じた。

車のドアを開けようとすると、ジュシが小声で「あの……」と言った。何気なく振り向いた私の首に腕を回し、頬に軽くキスして「お返しよ」と囁いた。そして、ふわつと飛びのくと、走って玄関に入ってしまった。

花束

やられたな。ジュシの完勝、私の完敗。クルマを走らせながら、まだ隣にジュシがいるような気がする。不思議な女性だ。必ずもう一度会いに行こう。

帰り道は教えられたとおり、とても簡単だった。屋敷の門を出て左手に進むと数分でT時路に出た。右折して、道幅がかなり広い道を十分ほど走ると旧道だった。あっけなかった。夜と昼では道の印象が変わるとしても、これほど違うはずがない。昨夜とは違う道なのだろう。

旧道を少し走ってから路肩に止めた。カーナビでさっきの道を確認めたかったのだ。ディスプレイには道のようなものはない。旧道の左右どちら側にも森に入る道はなかった。旧道だけが一本道で表示されていた。きつと地図データが古いのだ。旧式のカーナビだから仕方ない。桑平の自分の別荘に向けて再びクルマを走らせた。

駐車スペースにクルマを入れる。何事もなければ昨夜のうちに帰って来ていたはずだ。時間に追われる仕事でもないの、一晩くらい無駄にしてもまったく支障はないのだが、それにしても奇妙な体験だった。

ネットで気象を調べると、昨夜遅く、このあたりを小さな低気圧が通過していた。風はそのせいだ。ジュシの屋敷でPCは見なかった。あるいは別の部屋にあるのかもしれない。天気図が大雑把にでも読めれば風の有無を予測できる。いつ吹くかと怯えているより少しは安心できる。今度行ったら教えよう。

まだ時刻は昼前。いつもなら寝ている。そう思うと眠くなってきた。ベッドに横になり、何かを考えようとしたがそのまま眠ってしまった。

目が覚めるとすでに暗かった。虫の声が草むらから響く。空腹だった。ツナ缶とトマト、賞味期限が切れた食パンを食べた。

お嬢様の気まぐれに付き合わされたのかもしれない。ジュシの暇つぶしのゲーム？それとも本気？気まぐれと本気の境はどこにあるのだろう。私にしても本心のままに行動したのだろうか。もし仮にゲームだったとしたら、私もプレイヤーだった。本気がゲームか、もう一度ジュシに会えば、すべてが解決する気がする。会って、話して、彼女の目を見れば、そこに答えがあるはずだ。そう信じる理由はひとつもないが。

ずっと昔、私は一人の少女に恋をした。毎日のように会い、ドライブし、食事し、他愛もないこと、深刻なこと、様々な話をした。その時代、一日一日が完璧に思えた。ただひとつ、私の迷いを除いて。

彼女を抱くこともできただろう。そうすれば私と彼女は「私たち」になっていたはずだ。その変化が怖かった。私は変化より「このまま」を選んだ。

一年ほど経ったとき、彼女は離れていった。数カ月後、共通の友人が彼女からの言伝があったと言った。「バカ」という一言だった。

私は当時とまったく変わっていない。

ジュシを好きなこと、恋をしそうになっていることは認めなければならない。別れ際の「お返し」で、それは決定的になった。また「バカ」になってしまったのだろうか。

いや、すべては私の思い込みかもしれない。今夜は風がない。ジュシは私のことなど忘れて眠るのだから。四十面下げて恋も愛もないものだ。きちんと仕事を始めよう。PCを開いて文字を打とうとしたが無理だった。

深夜に虫の音は静かになった。虫も眠る。私も眠ろう。暗闇に目を凝らして、私は決めた。約束通り、花束を持って訪ねて行こう。

朝まで一睡もできなかった。

旧道を峠とは反対方向に下り、バイパスとの合流点にある大型スーパーに行った。広大な駐車場にクルマを停め、テナントの花屋で花束を作ってもらうことにした。

「どんな花束がよろしいですか？」と訊かれ、まさか世界中の花を束ねた、とは言えないので、「バラにしてください。赤がいいです」と答えた。

店員は心得顔で、手早く花を揃えて、「これでいかがでしょう」と差し出した。

どこか違う。結婚式か卒業式のように見えた。

「その白いモシヤモシヤしたのは要りません」

「カスミソウ、要りませんか。無いとボリュームが出ませんが」

「じゃ、バラをもっと足してください。その三倍くらいに」

店員は不満そうだったが、私が払わされた金額には満足したに違いない。

花束をリアシートに置き峠を目指す。昼間でも旧道の交通量は少ない。峠まで対向車はなく、ゆるゆる走る

軽トラックを一台追い越しただけだった。

峠の上でカーナビをオンにする。森に入る道を見つけたら、その位置をマークするためだ。

追い越した軽トラと同じようなスピードで峠を下り始めた。道の右側に神経を集中した。森は切れ目なく続いている。所々に金網が張つてある。動物除けか何かだろう。

細い道をみつけたときには鼓動が早くなった。ここだろうか？ ジュシを送って旧道から左折した道に似ていなくもない。ただ、少し峠に寄り過ぎているような気もする。とにかく右折して入ってみた。

とても走れる道ではなかった。路面は土のままで轍の跡が深すぎる。それでも数十メートルは進んでみた。ひどい道だ。大きな石が道の真ん中にあり、バンパーに当たるか、そうでなければ腹を擦ってしまいそうだ。私のクルマでは走れない。断念してバックのまま引き返した。

旧道に戻って、また右側を見ながら進む。道は無い。人間の踏み分け道も見当たらない。こんなはずはない。屋敷への往きの道はとも狭かったので見落とすかもしれないが、屋敷から出てきた道は旧道より少し狭いが立派な砂利道だった。見落とすなど絶対にありえない。

それでも道は見つからなかった。

いつの間にか左側の森が途切れ、右側はガードレールになっていた。この先がジュシと出会った場所だ。ここまで来たのなら探している道を行過ぎてしまったことになる。

出会った場所を確かめておきたかった。自転車はまだ置きっぱなしかもしれない。

道の左側は土の急斜面がせり上がり、右側は谷に落ち込んでいた。しかも道は急斜面に沿って左に九十度以上カーブしている。一昨日の夜、霧の中で大きく右に曲がったとき、ジュシの自転車が現われたのはこのカーブに間違いない。

車を停めてあたりを見回した。恐ろしかった。霧が出ていて、かえってよかったと思う。視界が良くて、かなりのスピードでコーナーに突っ込み自転車を避け損なっていたら、クルマは谷底に落ちていたかもしれない。道の端に自転車はもうなかった。トラックで運ばせたのだろう。

少し坂を下り、広くなったところでUターンする。もう一度探そう。旧道を峠方向に引き返し、左側の木々を一本も見逃さないようにしながら走った。

何も見つけれないまま峠に着いてしまった。左に入る道は、さっき入った荒れた道だけだ。やはりあの道なのだろうか？ 奥にジュシの屋敷があるのだろうか？ 一夜にして道が荒れてしまうことなどあるのだろうか？

もう一度峠から引き返すことにした。もしかすると旧道の反対側かもしれない。右折を左折と勘違いするほど方向感覚は悪くないはずだが、あり得ないことでもない。今度は左側にも注意しながら旧道を下る。

左側にも森に入る道は一本もなかった。どういことだろう。夢を見ている気分だ。二往復しても道を見つけれないとは。わけがわからないままジュシと出会ったカーブを通り過ぎ、そのまま道を下って鳶沢の集落に入った。

駐在所は留守だった。戸は開いたままで、いくら声をかけても誰も出てこない。中にスチールデスクがあり、上で猫が大きく伸びて寝ている。白に黒いブチのオス猫は、私を一度じろつと睨んだだけで、また眠った。

「駐在さんかね。もうすぐ帰ってくるよ」通りかかった老人が教えてくれる。私は待つことにした。

タバコを二本吸い終わると、原付に乗った駐在さんが戻ってきた。いかつい顔をした腕力タイプの警官だっ

た。

「いやあ、お待たせしました。中で待っててくれればよかったのに」

「猫がお昼寝中で」

「ああ、あれは人が近づいたくらいじゃ起きません。この辺に居ついている人懐こいやつですよ。さあ、どうぞ中に。その椅子に掛けてください」

私と駐在さんはデスクを挟んで、つまり猫を挟んで向き合った。

「あるお宅に行く道がわからなくなりました」

「何という家ですか？」

訊かれるのは当然だが、ジュシの苗字はわからない。正直に言うしかないだろう。

「苗字はわかりません」

「それじゃ、ところ番地は？」

「ええと、それもわかりません。山の中にある大きな家なんです」

「ううん、困ったなあ。訪ねる家の住所も名前もわからないと、どうしようもありませんが。ところであなたはどこにお住まい？」

どうやら怪しいやつと思われたようだ。私はとりあえず名刺を出した。フリーなので肩書きなどないから、何の役にも立たないのだが。

「ライターをしています。その住所は東京の家で、今は桑平の別荘にいます」

「それでは別荘の住所と電話番号を裏に書いてください」

言われた通り、裏に書いて渡す。

「なるほど。桑平は私の管轄じゃありませんが、そちらの駐在所を教えましょうか」

「駐在さんの管轄はどこまででしょう」

「桑平方面なら、手前の峠までになっています」

「じゃ、あなたでいいんです。その家は峠の手前にあるんです」

「どの辺ですか？」

「国道の旧道をずっと登って行って、左側の森の中です」

「待ってください。左側も右側も、鳶沢を出たら家なんかありませんよ。畑が切れたら森だけですがね」

駐在さんは柵から地図を出してきた。そして、

「はいムラタ、ちよつとどいて」と猫に声を掛ける。猫はゆっくり起き上がってデスクの端に移動し、もう一度寝そべり直した。

「ムラタ、ですか？」

「そう、こいつ顔がでかいでしょ。だから村田英雄ね。この猫、人間の言葉は大抵わかります」

猫がどいたスペースに地図を広げる。かなり精巧な地図だが、ジュシの屋敷も道も描かれていない。

「どの辺ですか？」

私は旧道を指でたどり、大体の見当で地図上で指を丸く回して「このあたりです」と言った。

「ここ？ 桃花平だね。私の知る限り家はないなあ」

「トウカダイラっていうんですか」

「そう、旧道のあの辺は少し平らでしょ。地元ではそう呼んでいます。桃に花に平ね。正式な地名ではありませんよ。呼び習わしてるだけで。桃の木なんか一本もないけれどね」

「じゃ、桃花平に別荘地ありませんか？」

「ないない。あったら別荘の人が買い物に来て鳶沢も多少は潤いますがね。残念ながらありません」

「いや、たしかに一軒だけあったんです。この春に完成したと言っていました」

「そうかなあ……それはいいですよ。だって、この辺は国有林だから家は建てられませんよ。キャンプだって禁止ですから」

「実際におとこの夜、私はそこに泊まりました。家はありましたよ」

「失礼ですけど、違う道と勘違いしているとか」

「多分、いや、絶対ここです」

「弱ったなあ。何という家かわからないし、家なんか無いはずの場所だし。……どうしてその家に行きたいんですか？」

どこから話せばいいのだろう。最初から話すしかなさそうだ。私は旧道で霧に巻かれたところから始めた。駐在さんは大学ノートを出し、メモを取りながら聞いている。

「女性に出会ったのは、それは何時ごろでした？」

「正確にはわかりませんが、八時か八時半だと思います」

「地図でいうと場所はどこ？」

「ええと、ここです、この急カーブのところ」

「そこで霧の中の自転車に追突しそうになったの？ 危ないなあ。そこはガケ場といって、旧道でも一番危ないところですよ。左は断崖で逃げようがないし、右は土留めが効かない土の壁で、いつ崩れてもおかしくない。私だったら夜は走らないね」

「はあ」

「一応国道だから走るなどは言えませんがね、せめて夜はバイパス使ってよ。ガケ場だけで何人も死んでるんだから。ここ数年はどうにか無事故だけだ」

「はい、なるべくバイパスを使います」

「で、会った女性の年恰好や服装は憶えていますか」

私ははつきり覚えていた。

「ええと、歳は三十前だと思います。女性の歳はよくはわかりませんが」

「ごもつとも。どんな服装？」

「スカートの長いワンピースでした。色は青っぽかった。帽子を被っていましたよ。チューリップ帽というのでしょうか、周りのふちが広めで、下に垂れるような帽子です。黒っぽかったかな」

「背丈は？」

「そうだなあ、ヒールを履いて一メートル六十弱くらいだと思います」

「ヒール？ 山道で？」

「そうなんです。無理でしょう？」

「どんな靴でも違反じゃないけどね、何も考えていない人はたくさんいますから。それで、どんな自転車でした？」

「どんなって、ジュシばかり見ていたので自転車はあまり憶えていない。ただ、霧の中でライトにいきなり照らし出された後ろの形とフレームの色だけは憶えていた。」

「全体の形はわかりませんが、色はピンクでした。かなり派手なショッキングピンク」

「ピンクね。そんな色の自転車なら実用車ではないね。後ろに荷台はなかったでしょう？」
「ありませんでした。全体に丸い印象でした」

駐在さんは、ピンクのママチャリ 詳細不明、とノートに書いた。

「それで、彼女を救助するためにクルマに乗せた、と。自転車はどうしました」

「右側の土手に立てておきました。さつき通ったら、もうなかったです」

「盗まれたのかな。被害届が出れば探せますが。それで、彼女の家というか別荘まで送ったわけですね。道順を詳しく教えてください」

できるだけ詳しく話そうとした。桃花平の真ん中あたりで旧道から左折し、入り組んだ細い道を走ったこと。細い道には曲がり角が沢山あって、よく憶えていないと言った。

「そうですか。でもほら、地図に道はありませんよ。細い入り組んだ道もないでしょう。旧道から左に入る道は峠寄りに一本あるけれど、一般車は通行禁止でね」

地図で示された箇所には点線の道があった。これが多分、午前中に入った道だろう。

「そこ、入ってみました」

駐在さんはやつと笑って、「ひどい目にあつたでしょう。年に何人かいるんですよ。無理に乗り入れてクルマの下回りを壊して動けなくなる人が。鳶沢の修理工場は喜んできますよ。通行禁止の標識を無視した罰だね」
「私は床下を擦る前に逃げ出しました。あの道は関係ないですね。あんなにひどい道ではなかった」

「普通のクルマじゃ無理だね。電力会社の作業車だけ通る道だから。ほら、ずっと先の山に高圧線の鉄塔があるでしょ。その保守用でね」

「道は山まで続いているんですか？」

「まさか。旧道から五百メートルくらい。あとは徒歩ですよ」

「長さからいっても別荘の道ではありませんね。これは違う道だね」

「だけど他に道はないですよ。まあ道の話は後にしましょう。どんな家でしたか？」

石の塀と鉄の門があつて、ホテルといわれてもおかしくない大きな館。全館の電気が点くと、まぶしいくらいに明るかったことなどを話した。

「すごいね、まるで山の中の竜宮城だ。人は何人ぐらいいました？」

「それが、誰もいませんでした。女性一人だけで住んでいました」

「一人だけ？ 乙姫様ひとりか。物騒だな」

「私もそう思います。でも、一人でしたよ」

「まあ、変な組織の建物でないといけどね。門に表札はありましたか」

「表札ですか・・・、暗くて気付きませんでした」

「家の中に名前を書いたものはありませんでした？」

「ええ、目に付く限りは」

「それじゃ、女性に名前を訊かなかったの？」

「それは訊きました。寿の子と書いてヒサコだと教えてくれました。苗字は聞いてないです」
駐在さんはノートに寿子と書いた。

「ヒサコさん、ね。これだけじゃわからないですよ」

「すみません」

「謝らなくてもいいけど。それで、その後怪しいことはありませんか」

「全然怪しくはないです。お茶をご馳走になって、食事が出て、食後に酒を飲みました」
「クルマで行ったのに？」

「いや、飲酒運転するつもりはなかったんです。だから泊まったわけで」

ここは少し嘘をついた。酒を飲んで少しでも公道を走れば飲酒運転だし、ジュシの恐怖神経症を説明するの
も面倒だったからだ。

「で、美女と一夜を共にした、と」

今度は、一夜を共に、とノートに書いた。

「あのう、その表現は適切でないような気がしますが」

「だって、泊まったんでしょう。いいんですよ。成人男女が合意の上で何をしようと警察は介入しません」

「参ったな。ちゃんと客室があつて、そこで寝ました。それに、私は美女なんてひとことも言つてません」

「ほう、じゃあブスだった、いや、容姿は優れなかった」

「そういうわけでもないです。いわゆる美人タイプではありませんが、まあ、かわいいタイプかな」

「あはは、冗談ですよ。容姿は問題ではないからね」

駐在さんは楽しんでるようだ。こんな御伽噺のような話に付き合わされているのだから。せめて面白がら
ねばならないのだろう。

「それで、どうしました？」

「朝起きて、朝食をご馳走になって、桑平の別荘に帰りました」

「何時ごろ」

「そうですね、桑平に着いたのが十時過ぎくらいだから、向こうを出たのは九時半、でしょうか」

「それで全部ですか？」

「いえ、もうひとつ妙なことがあります」

猫が私を見てあくびした。駐在さんもあくびしそうだった。

「向こうの屋敷を出てから旧道までの道が、とても簡単だったんです」

「それが？」

「だって、別荘まで送って行つた道は、細くて曲がりくねっていて、枝道がたくさんありました。それが帰
りは一度T字路を右に曲がっただけで、ほぼ一直線で」

「違う道だった、ということですか」

「そう、別荘までの道は、少なくとも二本あるはずなんです」

「でもねえ、この地図の通り、道なんか一本もありませんよ。あなたも実際に確かめたんじゃないですか？そ
れで道がないのでここに来た。違いますか」

「その通りです。今日、朝から二往復して道を探しました。なかったです」

「誰が探してもないと思いますよ。申し訳ないけど私は力にはなれませんが。何か事件なら警察は動きますが、
お聞きした限りでは事件性はないし」

「そうですか。お手間を取らせました」

「公務ですからね。一応お話は聞きましたから、何かあったら連絡しましょう」

もうひとつ聞くのを忘れていた。

「すみません、もうひとつだけ」

駐在さんは、あまりいやな顔はしなかった。また面白い話と思つたのだろうか。

「はいはい」

「鳶沢で自転車売っている店はあるでしょうか」

「自転車屋ねえ、昔は二軒あったけどね。今はどちらも廃業しちゃってます」

「それでは、今自転車を売っている一番近い店はどこでしょうか」

「そうだなあ……、バイパスを市街のほうに十分くらい走るとホームセンターがあつて、そこで売っているが一番近いかな」

「ありがとうございます」

私は立ち上がって猫の頭を撫でた。猫はじろりと見返してきた。

電話線

また食糧を買い忘れた。桑平に帰り、バラが枯れないよう花瓶になるものを探したが何もなかった。仕方がないので水を張った風呂に花束をほぐして入れた。食料のことを思い出したのはその後だった。

去年から置いてあるパスタを茹でた。標高が高いせいかわ、何分茹でても芯が残る。ケチャップをかけて炒め直したら、どうにか食えるようになった。特に旨いものを食いたいとは思わないが、不味いものは食いたくない。明日は何があつても食糧を買おうと決めた。

ジュシに会い、花束を渡したかった。風呂場のバラがどこことなく恨めしい。どうしたら会えるのだろう。もう一度だけでもいいのに。

今日一日探しても屋敷への道はなかった。地図にも載っていない。警官も知らない。道は忽然と消えてしまった。そんなことがあるだろうか。それとも、電力会社の道が屋敷への道で、たった一晩で荒れ果てたのだろうか。いや、昨夜はよく晴れていた。道が壊れるはずはない。

今夜は静かな夜だ。風は吹いていない。ジュシも安心して居るだろう。きちんと名前を聞いておかなかったのが悔やまれる。電話番号も聞くべきだった。

そうだ、あの屋敷には電気も電話も来ていた。国有林だから家は建たないというが、現に屋敷はあったし電気は煌々と点いていた。電話もかかつてきていた。電話線が引かれていなければおかしい。明日は電話局へ行ってみよう。

電力会社も調べるべきだろうか。普通なら電話より先に電気を引く。ただ、サービスエリア外に電線を敷設するにはかなりの時間と目玉が飛び出るほどの費用がかかる。ジュシの家なら費用は問題ないだろうが、この春完成したばかりの家だから電気がまだ来ていないこともありえる。ディーゼルの自家発電なのかもしれない。十キロワット以下の発電機なら法的な規制もなく簡単に設置できる。十キロで、あの屋敷の照明を全部まかなえるかは疑問だが。

電話と電気、どちらを先に調べても同じだ。それなら確実に電線があるはずの電話にしよう。必ず手がかりがつかめるはずだ。

このあたりの電話局をネットで調べた。鳶沢に局はなく、市街にあった。ネットの地図では電力会社もその近くにある。明日はバイパスで市街へ行こう。

ついでに、思いつく限りの地図サイトで桃花平を探してみた。どれも駐在所の地図と同じだった。横道はある荒れ道しかない。空撮写真にも道らしきものはない。屋敷も写っていない。多分、データが古いのだろう。屋敷は必ずある。なければジュシに会えない。

今夜はこれで手詰まりだ。風呂場のバラを思いながら、いつの間にか眠ってしまった。夢の中で、花束を受け取ったジュシが「これで世界の花は全部？」と訊いた。私は「今のところは」と答えた。

朝八時に目覚めた。心ならずも健康的な生活サイクルに変わったようだ。朝食は要らない。そのままクルマで出かけた。一瞬、今日も旧道で桃花平を通りたい誘惑にかられた。帰りには通ることにしよう。まず、電話局に行くのが最優先だ。

花束を買ったスーパーの前を通ってバイパスに入る。道は空いていた。電話局でどう話そうか。まさか、桃

花平に家があつて名前はわかりませんが、電話番号を教えてください、では絶対に教えてくれないだろう。個人情報保護以前の常識の問題だ。

私は作戦を立てた。少々嘘をつくことにはなるが、誰が傷つくわけではない。多分法律にも触れない。

バイパスをゆっくり三十分も走ると市街に入った。駐在さんが言っていたホームセンターが見えたので寄ってみることにした。

自転車売り場はごく狭いスペースで子供用ばかりが目立った。ママチャリも数台あったが、どれもジュシの自転車とは違う。それでも一応、店員に聞いてみた。

「うちの店内が自転車を欲しがってしまって、数日前に、ここでショッキングピンクの自転車を見たと言っているのですが」嘘をつくトレーニングだ。

「ママチャリですよね」店員は答えた。「数日前ですか・・・在庫は今と同じです。ここ二十日ほど一台も売れていませんから」

バイパス沿いも不景氣らしい。

「そうですか。じゃ、本人に來させます」

店員の「お待ちしています」という元気な声を背に店を出た。

電話局のカウンターでは番号札を取って待つ決まりだ。手に取ったと勝手に私の順番になった。誰も待っていないから当然だろう。

「どんな御用でしょう」対応に出た快活な若者が言った。胸のプレートに「お客様係 キムラ」とあった。

「別荘に電話を引く手続きをうかがいに来ました。友人の代理ですが、いいですか？」

「ありがとうございます。どちらの別荘地でしょう」

「いや、まだ別荘地というほどのものではなくて、これから分譲されるらしいのですが」

「どこにでも電話は引けますから大丈夫ですよ」

「この辺の地図はありますか？」

「はい、しばらくお待ちください」

若者は駐在所で見たのと同じような地図を持ってきて広げた。

「このあたりです。なんでも桃花平という場所で」

私は屋敷あたりを示した。

「そこですか。ううん、お客様のご希望があれば電話は引きますが、そこだと普通より工事費が高くなりますね」
 ほぼ計画通りに話は進んでいる。昨夜、にわか勉強した甲斐があった。私はとぼけて言った。「高くなるって、
 どうしてでしょう」

「普通はですね、近くを通っている電話線から引込み線だけ持ってくるんです。それが通常の工事費になります。
 ご希望の場所だと電話線が近くにないんです。国道から引つ張ってこなくちゃならないので、その費用をご負担
 いただくことになります」

「高いんでしょうか」

「安いとはいえないかもしれませんが。百メートル単位で九千円かかります。ここだと、そうだなあ、旧道から直線でも二キロくらいありますから、ざっと二十万円でしょうかねえ。場所がもつとはっきりわかれば、正確な見積もりを出せますが」

「そうですか。友人は何て言うかな。でもね、それは旧道から引いた場合でしょ？」

「ええ」

「もし近くに別の家があつて、そこが電話線を引いていたら、便乗というか、使わせてもらうというか、できませんか」

「それは、一般論では可能です。ただ、先に引かれているお宅の専用線ですから、話し合いでいくらか負担することになるのが普通です。工事費の半分くらいで決まることが多いですよ」

「この場合だと十万円？」

「そうです。でもこれ、あくまでも一般論ですから。専用線だから使わせない、と言われればそれまでです」

「わかりました。丁寧に交渉するしかないですね」

「でも、お客さん、桃花平には電話を引いている家なんかありませんから、交渉もなにも」

「そうですか？ いえね、友人が言うには、近くに、そう、百メートルも離れていないところに大きなお屋敷があつて、電話を使っていたと言っていました」

「ええと、そうだったかな。ちょっと待ってください」

コンピュータで何か調べ始めた。

「やはり電話線はありませんね。そのお宅では本当に電話をお使いですか？」

「ええ、古い三号電話機だったので、よく憶えていると言っていました」

「するとダイヤル回線ですね。どうしても有線電話だなあ・・・」

「どういうことでしょう」

「電話線を引かなくても電話はできるからです。携帯電話がそうでしょ。普通の携帯電話で圏外の場合でも、

専用のアンテナを立てれば電波を拾えることもあるんです。桃花平はほとんどが圏外ですからね。携帯は私の営業範囲ではないですけど、地元なんで知ってます。でも、携帯電話ではダイヤルパルスは使えません。トーンだけです。ピポパだけ。黒電話はピポパではなくダイヤル回線専用です」

「なるほど。つまり、黒電話を使っているなら有線電話なわけだ」

「普通はそうです。ただ、技術的には、ダイヤルのパルスを検出してトーンに変えることも不可能ではありませんし、少し前まで、そんなアダプタも売られていました。今はあるのかなあ」

「そのアダプタを使えば、黒電話も携帯というか無線電話になる」

「いや、技術的な可能性ですよ。そこまでする人がいるかどうかは別です」

あの屋敷全体の凝りようを思えば、そこまでしてでも黒電話を使うだろう。蛍光灯やLED電球は一切使わず白熱電球だけ。オーディオ装置もテレビも見える場所にはなかった。ローテク趣味を徹底するためになら、いくらかでもハイテクを使うだろう。

再びコンピュータ画面見ていた彼が「あつ、これは」と小さく言った。

「何かありましたか？」

「多分というか絶対に違いますけど、古い路線図で廃用になった分岐を見つけました。旧道から桃花平方向に電話線を分岐した跡です。廃用ですからもう使われていませんが」

「いつ使われなくなったか、わかりますか？」

「廃用年は書いてないなあ。お友達がその大きな家に行かれたのは、いつごろでしょうか」

「十日ほど前と言っていました」

「今から十日前ですか？」

「そう」

「じゃ、違いますね。この線は、少なくともここ十年は使われていませんから」

「そうですか。そんな昔に、森の中に誰が電話を引いたんでしょうね」

「記録はもうないと思います。こんな山の中に電話を引くなんて・・・たとえば林業の大きな計画でもあつて、現地事務所に臨時に引いたのかもしれない。住める場所じゃないですから、そんなところでしょね」

窓口の若者は、こんな無駄話のような問い合わせにも気持ちよく付き合ってくれている。昨日の駐在さんといい、この辺の人はみんな親切だ。

「あのう、だいぶ長い時間話しますが、お仕事のお邪魔では？」私は一応言ってみた。

「お客様ですからね。それに、後ろを見てください」

振り返ると、相談を待っている人は一人もいなかった。

「でしょ？ お客様が帰られたら、私、事務仕事しなくちゃいけないんです。ご相談はいつまでも構いませんよ」と少し声をひそめて笑った。

そうか。人には苦勞がいろいろあるものだ。

「それでは遠慮なく居座らせてもらいます」

「どうぞどうぞ」

「古い電話線は関係ないとして、逆に新しすぎてデータに載っていないことはないでしょうか。というのは、友人によれば、その大きな家はこの春に完成したらいいんです。電話を引いたのはごく最近かもしれない」

「ごく最近ですか。聞いてないですね。こういう小規模な電話局ですから、新規のご契約は私が全部目を通して作業の手配もしています。もし今年の契約なら、特に専用線の新規敷設だったら忘れるはずはありません」

「そうですか。やっぱり無線電話でしょうか」

「可能性としてはそれしかないでしょうね。携帯電話以外にも衛星電話っていう方法もありますし。外部アンテナを付けても携帯の圏外になるなら、衛星電話しかなくなります」

「そこまでのかな」

「ふつうはしませんね。でも、世の中にはいろんな人がいますから……ひとつ伺ってもいいですか」
「ええ」

「私の家は鳶沢なんです。だから桃花平は地元ですから、かなり知っているつもりですけど、あそこに本当に家があるんですか？」

「実は、それも少し怪しいんです。電話を引く相談に来て無責任ですが、家があると言っているのは友人だけで、鳶沢の駐在さんは無いと言っています。昨日会ってきました。親切でしたよ」

「両角さんが知らないなら、家はないと思いますよ。仕事熱心な名物警官ですから。猫がいまませんでした？」
「いました。ムラタというブチのが」

「今度、夕方七時ごろ行ってみてください。両角さんが百匹近い猫に食べ物をやっているのが見られます。かなり壮観です。宣伝して鳶沢の村おこしにしようなんていう話も出てくるくらいのもので」

「猫、ですか」

「ええ、野良猫、家猫、区別せずに。せっかく生まれてきた命が腹を減らしてはかわいそうだって。おかげで地域にネズミが出なくなつて大助かりです」

「駐在さんは結構心優しいかたなんですね」

「あの顔からは想像できないくらい優しい人です。もちろん人間の面倒を見るのが本業ですけど、猫や犬にも

優しいんです。ところで、たしか、その家はこの春建つたんですよね」

「そう言っていました」

「だとすると、本当に建つたのなら建築現場を見ている人間がいるかもしれません」

「どなたでしょう」

「私の兄です。趣味で猟師をやっています。桃花平には山菜取りの人でも奥までは入りませんが、兄は鉄砲持つてどこにでも行きます。桃花平は庭みたいなもんでしょう」

今までで一番頼りになる情報だった。

「ご紹介いただけますか」

「もちろんいいですよ。今、兄の家の地図を描きましょう。ちょっと変人で、山奥に一人で住んでいます」

地図を受け取って電話局を出た。大収穫だ。窓口の若者に嘘をつき通したことが悔やまれる。全部解決したら、手土産を持って謝りに行こう。

桃の木

こんなところに人が住んでいるのかと思うほど辺鄙な場所だった。桑平峠の尾根続きで、私の別荘地と桃花平の両方を見おろす尾根筋に家というか小屋があった。小屋の手前数十メートルのところに軽トラが停まっていた。軽トラの隣に駐車し、歩いて坂を登った。

茶色の犬が寝そべったまま私を見た。警戒する様子はない。家に近付くと半ズボンにTシャツの男が縁側に腰掛けているのがわかった。四十少し前に見える。彼がキムラ氏のお兄さんだろう。

「こんにちは」と声をかける。

「何か用ですか」迷惑そうな声が返ってきた。

「電話局の弟さんから紹介されて来ました。これ、もしよろしければ」買ってきた一升瓶二本を差し出すと、「いやあ、悪いなあ。どうぞこちらに」縁側に手招きされた。とりあえず関門突破だ。

「お酒が大好きでなかったらと思い、これも買ってきました」羊羹の包みも出した。こっちのほうが高かった。

「ほう、虎屋。いただきますよ。まあ座ってください。お茶も何もないけど、風通しがいいのだけが取り柄で」たしかに涼しい。標高は千二百メートルくらいだろう。

「弟さんから獵師をなさっているとうかがいましたが」

「ただの道楽だよ。これ、ちよつといただいてもいいかな」彼は湯飲みを二個持ってきて酒の封を切った。

「あつ、私はいただきますせん。クルマなので」

「駐在に見つからなけりやいいんだ。飲んでも運転はできるさ」

「そうですけど、谷に落っこちるのも怖いし」

「そうかい。無理には薦めないよ。昔から旨いものとコタツは小人数がいい、って言うだろ」

「コタツですか？」

「そう。コタツに大勢で入ってみろ。風がスカスカ入って寒いじゃないか」彼は口をあけて笑った。

「それじゃ、羊羹食うかい？」

「いや、下の町で食事してきたばかりで」

「どうも、悪いなあ。で、どんな用なんだ？」

「ええと、変なことをお訊きするかもしれませんが、この春、桃花平に大きな家が建ったのをご存知かと思ひまして」

「家が建った？山の中に？」

「ええ、弟さんから、桃花平に詳しいとうかがってきました」

「そりゃあ、あのへんは俺の獵場だが。大きな家ねえ。知らないなあ。獵期が終わってから建て始めたんじゃないかな」

「獵期って、いつまででしょうか」

「毎年十一月十五日から二月十五日までだよ。それ以外は鉄砲撃っちゃいけないんだ」

二月中旬から建て始めて、あの西洋館は春のうちに完成するだろうか。春がいつまでなのかはわからないが、建売住宅ではあるまいし、一ヶ月で完成とはいかないだろう。森の中だから、まず不要な木の伐採から始めなければならぬはずだ。

「もしかすると二月にはまだ建て始めていないかもしれません。でも、建てるために木を切ったり整地したりしてたと思います」

「ううん、それも見てないな。桃花平のどの辺かね」

「鳶沢から旧道を行って、左にかなり入ったところですよ」

「ちよつと待ってね」彼は新聞紙とマジックを持ってきて地図を描き始めた。まず旧道を描き、周囲の山の稜線を描き、桃花平の外形が出来上がった。驚くほど正確な地図だ。道の九十九折やカーブも見事に正しく描かれていた。「どの辺だね？」

私は駐在所でしたのと同じように、「この辺ですよ」と指で示した。

「その辺ね。ただの森だな。イノシシよりシカが多い平地だ」

「シカですか？」

「そう、あの犬といっしょに獲る」日陰で伸びている犬を指差した。「あいつ、夏場は番犬にもならんが、雪が降ると犬らしくなるんだ。シカの追い出しなら、どの犬にも負けない。おいタケ、お前のことだぞ」

犬はだるそうに目を開けただけだった。

「とはいっても、今じゃ猟師は俺だけだから、比べる犬もいないがね」

「犬と二人、というか、それだけで行くんですか？」

「そう。猟師を始めたころは、あと二人ばかり爺さんがいたが、どっちも耄碌して死んじまった」

「歩いて行くんですよね」

「そりゃそうさ。スノーモービルなんかで行ったら獲物はみんな逃げちまう。歩いて行って、二、三日山の中にいるよ」

「ずっと山の中に？心細くないですか」

「慣れてるよ。何も怖くないさ。だが強い風だけは敵だ。寒さが何倍にもなるんだ。来なきやよかつたと思つたことも何度かあるがね。だけどそれでも森の中は好きだ。そうそう、風除けの塀がそのあたりにある。古い大きな石造りの壁で、誰かが昔作つたんだろうかね。そこまで行ければ犬も俺も安心だ」

「森の中の壁ですか。廃墟ですね」

「何かの廃墟だろうな。あそこには何かあつたのはたしかだと思うよ。壁の近くに桃の木がたくさんあつて、十メートル間隔くらいで五十本くらいかな、整然と植わってるから、人間が植えたんだ。咲いたら見事だろうって、昔、爺さんたちと話してた。でもな、猟は二月で終わりだし、俺たち以外誰も森に入らないから、花が咲いているのを見たことある人間はいないだろうよ」

私は胸が苦しくなってきた。石の塀、整然と並んだ桃の木、ジュシの屋敷と一致する。それが廃墟になつていくという。どうということなんだ。

「いつごろのものかわかりませんか？塀以外に、何か残っていませんか？」

「さあなあ、爺さんたちが生きていればいくらわかるかもしれないが、俺が猟師になつたときからあの塀は古びてたから、そうだなあ五十年は経ってるんじゃないかな。とにかく古いのさ。塀のほかは何かあつたとしてももうわからんよ。森の中だ、草に埋もれちまつてる」

彼は酔いが回ってきているようだ。一升瓶は半分ほどになつていた。

まだ訊きたいことはあつた。しかし、混乱している頭の中を整理したくもあつた。

私はその家を辞した。

自転車

教えられた事実は、私にとって失意と落胆と大きな疑問符だった。あの屋敷はもうないのだ。ずっと以前、そう、立派な西洋館が崩れ落ちて草に埋もれるほどの昔、鉄の門が錆びて朽ち果てるほどの過去に屋敷は建っていた。そのころジュシも生きて、あの場所にいたのだろう。

旧道から分岐する電話線は当時のものだ。三号電話機、白熱電球、テレビがなかったこと、すべて符合する。鳶沢で自転車を買えた時代なのだ。それがいつなのか、正確にわかったところで意味はないが。

三号電話機のダイヤル発信対応の自動交換機が、こんな田舎にあつたかどうかはわからない。しかし、国有林を開発できる地位と権力を持つていれば、交換機設置など容易なことだったろう。

これで一件落着？ いや、逆に謎が増えただけだ。過去に存在した屋敷に、私はどうやって行けたのか？

SFなら、あの晩、霧の中でタイムスリップしたことになる。小説なら面白いが、我が身に起こったこととなるとまったく信じられない。いくら超常現象を否定しない私でも、あまりに現実離れしていて、タイムスリップ説は受け入れられない。

より現実的に考えるなら……これもまた非現実に見えるが……あの晩、あの屋敷で一瞬感じた妖気に似たものが正解だったのかもしれない。人里離れた森の奥深くに生きる桃の木が、あまりの人恋しさにジュシという桃の精を遣わして私を招いた。屋敷や道路は私のために一夜限りで復元された。ジュシが強風を怖がったのも、大きな桃の古木なら当然のことだ。そしてジュシという名前。桃の木の涙、樹脂のことか。

どちらにせよ、私からジュシに会いに行く手立てはもうない。ここで、あるいは東京で、永遠に来ないかもしれないジュシからの接触を、何もできずにじっと待つしかないのだろう。

合理的な説明はない。ただ、結論だけがある。私は結論を受け入れよう。選択肢はないのだから。駐在さんにもう一度訊かれたら、こう答えよう、

あの日は寝不足でした。きっと路肩に駐車して眠ってしまったんだと思います。その間に見た夢です。

やはり食料の買出しを忘れていた。あちこち探して、五年前のカップラーメンを見つけて食べた。さすがに不味かった。

もう二度とジュシには会えないのだろうか。会えるなら、会う手段があるのなら、本当に世界中の花を全部集めてもいい。風呂場のバラは、まだ美しく咲いていた。

それから四日間、スーパーで食糧を買った以外、何もしないで過ごした。自分なりの結論は出たものの、理性と感情は別物だ。ジュシとの会話を何度も何度も繰り返し思い出した。彼女のいたずらっぽく動く瞳、しとやかな仕草、風の音に震える指先、柔らかかった頬、すべてが昨日のことのようだ。今は思い出すためだけに生きている。それで充分だった。

四日目の夜、強い雨になった。風も吹いている。こんな夜にジュシは一人でのるのだろうか。今はもう存在しない桃花平の屋敷で、風音に耐えているのだろうか。屋敷は崩れ落ちてしまった。ジュシは過去の女性だ。その事実を半分は受け入れ、もう半分は受け入れられない自分に、私は苦しんでいた。いろいろ考えた。そし

て、深く考えたわけではなく、単純に決めた。明日東京に戻ろう。

雨戸を閉め、水周りの始末をしてクルマに乗り込む。数時間後には東京の家だ。ジュシは忘れられないが、奇妙な体験とは距離を置けるだろう。バイパスを行こうか、もう一度だけ旧道を通ろうか迷った。迷いながら走り出し、迷ったまま旧道に入った。

もう森の奥への道は探さない。景色を楽しみながら走る。桃花平は美しい森だ。三方向を山に囲まれ、鳶沢方向にだけなだらかに傾斜している。こんな絶好の地が手付かずで残っているのは国有林だからだろう。ジュシの父の計画は挫折したに違いない。どんな経緯で中止されたのか、そもそも計画の記録が断片でも残っているのか、時間があつたら調べてみよう。

左右の森が途切れ、右側にガードレールが現われた。道は目に見えて下り坂になり、ガケ場のすぐ手前まできたとき、前方に通行止めの標識が見えた。黄色と黒のガードフェンスが道をふさいでいる。

道が左に急カーブしていて現場を見通せない。ジュシと出会った場所だ。小型のパワーショベルが動き、何人かが作業しているようだ。先を急ぐわけではないから多少の足止めは構わないが、いつごろ通れるようになるのかは知りたい。クルマを降り、フェンスの間を抜けて中に入った。

土砂崩れだった。左の崖が崩れ、道が土に埋まっていた。大規模なものではない。土さえ除ければ谷側の車線はすぐにでも通れそうに見えた。

「入っちゃだめだよ」重機の向こうから声がして警官が出てきた。駐在さんだ。私の顔を見て、「なんだ、あなたですか。ガケ場が崩れましてね、もうしばらくかかりますよ」

「先日はお世話になりました。猫は元気ですか」

「猫も人間もみんな元気。元気じゃないのは世の中の景気とこの道だけだよ」

「崩れちゃいましたね」

「この程度で済んだのが奇跡だな。谷のほうまで崩れてもおかしくない場所だから」

「昨夜の雨でしようかね」

「そうだろうな。ノリ面をきちんと整備するか、それができないなら廃道とはいわないが通行止めにしてほしいよ。いつ崩れるかわからないんだから」

重機が動きを止めた。作業員が何か言っている。そして駐在さんと呼ぶ声が聞こえた。

駐在さんがカメラを取り出し、何かを撮っている。「なるべく動かさないで」と言いながら何枚も撮った。

作業員が土の中から何かをゆっくり引き出し、平らな場所に置いた。自転車だった。私は思わず近づいた。泥まみれで詳しい形はわからないが、後ろから見るとジュシの自転車に似ている。

「防犯登録はあるかな」駐在さんがフレームをぼろ布で拭き始めた。私はさらに近づいた。錆びていた。フレームもハンドルも錆で赤茶色だ。サドルは腐ってしまったのか、金属部分だけ残っていた。

「防犯登録はない、と。かなり昔から埋まっていたようだね。ここまで錆だらけだから」

「色はわかりますか？」

「さあな、どこかに塗料が残っていれば」

残っていた。リアタイヤの泥除けに、ごく少しいたが塗料が残っていた。ショッキングピンクだった。

私は桑平に引き返した。ガケ場でジュシが「帰らないで」と言っている気がしたからだ。

現場を離れる前、駐在さんが、何かわかったら必ず知らせると約束してくれた。待とうと思う。ジュシがもう一度サインを送ってきたのだ。ジュシとのどんな小さな接点も見逃したくない。

夕刻になっても電話は鳴らなかった。雨戸を一枚だけあけ、外を見ながら待っていた。夕闇の中をジュシが歩いて来る幻想。花束を用意しなければ。抱えきれないほどの大きな花束を。ジュシが花束を空に向かって高く放る。無数の花びらが地上に降る。私たちはジュシの屋敷に戻っている。ミュシャは生きているのよ、ジュシが言う。いつまでここにいようか、私が言う。森が閉ざされるまで、ジュシが答えた。

浴室のバラの半分は散っていた。私は良い花だけを選んで花束を作り始めた。ジュシに届けなければ。何故そう思ったのかわからない。とにかく花束を作ろう。世界中の花がここにあるから。

深夜近く、駐在さんから電話があった。

「遅くなって申し訳ない。まだ起きてました？」

「起きています。何かわかりましたか」

「今、まだ県警でね。やっと一段落したところだね。まず、崖から出てきた自転車は、あなたが会った女性のものではないね。フレームを洗ってみたら小さな銘板が付いてて、アメリカ製でした。それも千九百四十年代後半のものだから、戦後すぐくらいに輸入されたんでしょうな。腐食の具合からも、三十年以上、もしかすると五、六十年埋まっていたんじゃないかと。色は似ていても違う自転車です」

だから合っているんだ。叫びそうになった。

「ええ、違うようですね」

「それから、これは明日県警から発表になるけどね、あなたが帰った後に、自転車の隣から遺体が出たんです。自転車といっしょに埋まった可能性が高いね」

「どんな遺体ですか」

「完全に白骨化した遺体で、ちゃんと一体分揃ってますが、性別や年齢はこれから調べることになってます。それでね、一応役目柄、あなたが話してくれた女性のことを県警に報告しましたが、そんな数日前の出来事と遺体が白骨化するほど昔のことに関係はないだろうっていうことで、あなたはこの件に無関係ですよ」